

# 文化

## 花と子ども 画家

いわさきちひろ  
生誕100年

ちひろは新聞記者をしながら丸木アトリエや芸術学校で絵を学び、平和運動にも積極的に参加していた。

一方、貧しいながらも、生活を楽しむことも忘れてはいなかった。つてを頼って近くの映画館のフリーパスを手に入れ、好きな映画を繰り返し見ている。中でも気に入っていたのはタップダンスの王、フレッド・アステアだった。ちひろの映画の一方は、ストーリーは二の次で踊りや音楽や衣装や背景を楽しむものだった。戦前は映画で見た

### 日本童画会に入会

松本 猛 ⑪

### 尊敬する描き手とともに

ワンピースを自分で仕立ててしまつこともあったが、敗戦後の混乱期では生地を買う余裕はな

かった。それでも、つば広の帽に付け襟を買い、おしゃれをして町を歩いていた。

上京してから2年近くがたった1948年2月末、妹の世史子に娘が生まれる。もともと子ども好きのちひろだったが、めい

の誕生は、ことのほかうれしかったようで、時間をつくってはめいに会い、実家の松本に帰るといえば、仕事を断つてでもついて行ったという。

ちひろは日本童画会に入つた

当時のエッセーにはこんな言葉が残っている。「こどもがす

きなので、ひまなときにはいつも窓からくびをだしてみています。(中略) わたくしはそれを

みつけると、いつもスケッチいたします」。時にはあめをあげるといって、下宿に誘いモデル

にすることもあった。

そんなちひろに、日本童画会へ入会するチャンスが訪れた。

日本童画会は、ちひろが幼いころ「ゴドモノクニ」で親しんだ

武井武雄や初山滋らを中心として戦後、新たに立ち上げられたグループだった。

ここに掲載した作品は1951年の日本童画会展での受賞作である。ちひろが尊敬する初山

滋は「この人はうますぎる程だ」と激賞したという。

1年の日本童画会展での受賞作である。ちひろが尊敬する初山

滋は「この人はうますぎる程だ」と激賞したという。

ちひろは、日本童画会に参加し、確信をもって子どもの本の

ための画家として歩み始めた。

(美術評論家)



「赤いくつ」1951年(ちひろ美術館所蔵)

土曜日に掲載します